

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 7 日現在

機関番号：32704

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21720116

研究課題名（和文） モーリス・ブランショの文学論と現代芸術

研究課題名（英文） The literary theory of Maurice Blanchot and the modern art

研究代表者

郷原 佳以（GOHARA KAI）

関東学院大学・文学部・准教授

研究者番号：90529687

研究成果の概要（和文）：20 世紀フランスを代表する文芸批評家モーリス・ブランショの文学論や虚構作品における言語とイメージの関係性について考察し、単著『文学のミニマル・イメージ』にまとめるとともに、そこから出発して、(1) 19 世紀の詩人ステファヌ・マラルメの詩論や絵画論、(2) 1950-60 年代の現代芸術に見られブランショも実践した断章形式、(3) 現代詩人ミシェル・ドゥギーの詩論や隠喩論、(4) 芸術作品をめぐるアポリネールやバルザックの短篇小説などの分析を行った。

研究成果の概要（英文）：I published *The Minimal Image of the Literature*, a study on the relation between language and image in the literary theory and the fictions of Maurice Blanchot, eminent literary critic of 20th century France. And from that perspective, I analyzed (1) the poetics and the essays on the picture of 19th poet Stéphane Mallarmé, (2) the fragmentary form found in the modern art in the 1950-60 and practiced by Blanchot, (3) the poetics and the essays on the metaphor of the contemporary poet Michel Deguy, (4) the novels on the work of art of Appolinaire and Balzac.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：仏文学、モーリス・ブランショ、言語とイメージ、断章、隠喩、ステファヌ・マラルメ、ミシェル・ドゥギー、ギヨーム・アポリネール

1. 研究開始当初の背景

19 世紀から 20 世紀にかけて、芸術の諸ジャンルは、それぞれに自己批判性を高めることによって、芸術の新たなあり方を協同して模索してきた。それゆえ、文学研究にとっては、文学そのものの変容を他の芸術の変容と相関的な形で跡づけることが肝要である。そ

のためには、「文学」からの解放としての文学のありようを、諸芸術に通底する「イメージ」の概念によって洞察し続けたブランショの文学論を考察の出発点とすることが有意義である。

(1) しかし、ブランショの文学論の全体を「イ

メージ」の観点から読み解く研究は存在していなかった。

(2) ブランショと現代芸術の関係に関する研究には 2007 年に刊行された Emmanuelle Ravel の著作があるが、前提となるブランショの「イメージ」概念の検討が不十分であるため、提示される「美学」が通念の域を出ておらず、言語芸術と視覚芸術の関係性についての具体的分析も不足していた。

よって、本研究によってブランショと現代芸術の接続を再提示する必要がある。

2. 研究の目的

(1) 文芸批評家モーリス・ブランショの文学論を、ブランショとほぼ同時代に興った視覚芸術および芸術理論と付き合わせて読解することにより、文学と視覚芸術の現代的な関係性を解明すること。

(2) 1960-70年代のフランスにおけるレトリック再興および隠喩をめぐる論争について調査・分析することにより、言語とイメージの関係性をめぐる思想の変容を「詩学」の問題として解明すること。

(3) 「芸術の起源」をめぐるアポリネールやバルザックの短篇を文学研究と美術研究双方の知見を用いて分析し、言語とイメージをめぐる研究に新たな観点を打ち出すこと。

3. 研究の方法

(1) ブランショの文学論における言語とイメージの関係性についての研究から浮かび上がってきた「多面的言語」というイメージをマラルメ、ベンヤミン、ミシェル・ドゥギーらの詩論、言語論、芸術論において追究し、19世紀から20世紀にかけての「表象の危機」とそれに伴う言語芸術と視覚芸術の並行的な革新のありようを明らかにする。

(2) (1)で検討対象となった「多面性」が、他方で現代文学と現代芸術に並行して見られた「断章形式」といかなる関係にあるのかを探るため、ブランショの断章形式の著作『彼方への一歩』を、「多面的言語」イメージを提示した初期言語論との関係において分析する。

(3) (1)で「多面的言語」という観点から注目した詩人ミシェル・ドゥギーの詩学を「~のよう (comme) の詩学」として析出するべく、ドゥギー詩論の読解を行う。具体的には、①ドゥギーが論客の一人となった1960-70年代フランスにおけるレトリックの再興、②そのなかで興ったドゥギーと文学理論家ジェラルド・ジュネットの「隠喩」をめぐる論

争を時代のなかに位置づけ、整理、分析する。

(4) 『文学のミニマル・イメージ』で検討したブランショの議論を踏まえつつ、言語とイメージ、言語と視覚芸術の関係性を小説のなかに探るべく、「芸術作品の起源」をめぐるいくつかの短篇を、芸術をめぐる様々な理論を参照しつつ分析する。

4. 研究成果

(1) マラルメにおいて多面的言語イメージは主として後期の詩論に現れるが、その萌芽は70年代の美術批評にすでに見られる。そのため、1876年のマラルメのマネ論「印象派の画家たちとマネ」を仔細に読解し、現代性(モデルニテ)と密接に関わる「典型」と「様相」という二種類のイメージを引き出し、それらの関係性の検討により、マラルメの詩的イメージの性質、および、それが「時代の危機」と取り結んでいる関係を明らかにした。マラルメ研究においても従来打ち出されていなかった観点として、マラルメ研究者にも参照されている。

(2) 断章形式で書かれたブランショの1973年の著作『彼方への一歩』を彼の過去の著作との比較を通して分析し、ブランショにおける「断片的なもの」の射程を明らかにした。アバディーン大学(スコットランド)でのブランショ研究会で発表した。ブランショ後期の断章を前期の言語論との関係において読み解く議論は新しいとして評価を受けた。

(3) 「共に置くこと」を詩の起源とみなし、詩には潜在的に「~のよう (comme)」という直喩表現の作用が含まれていると考える(これをわれわれは「commeの詩学」と呼ぶ)詩人・批評家ミシェル・ドゥギーの詩論の分析を行った。古代ギリシア以来のレトリックの盛衰および1960-70年代のレトリック復興と、ドゥギーとジュネットの隠喩論争を整理し、争点を明確にした。従来、研究領域の狭間にあつて死角となってきた問題であるが、この時代を総括しておくことは現代の文学研究にとってきわめて重要である。

(4) 「芸術作品の起源」についての独自の問題提起を行う小説の分析を行った。

① ギヨーム・アポリネールの短篇「オノレ・シュブラックの失踪」を、ロジェ・カイヨワやジャック・ラカンの「擬態」論や、美術批評における「不定形」論を参照しながら、「絵画の起源」神話として詳細に読解した。
② 芸術作品とは何かという問いをめぐるバルザックの短篇「知られざる傑作」の後世に及ぼした影響を分析した。

いずれも、文学研究と美術研究の橋渡しを

する論文である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

① 郷原佳以、「顔」と芸術作品の非一起源、現代思想 総特集レヴィナス、査読無、40巻3号、2012、pp. 285-299

② 郷原佳以、透明人間の肉体、あるいは、模倣と接触——アポリネールと「絵画の起源」神話、ART TRACE PRESS、査読無、1号、2011、pp. 104-119

③ 郷原佳以、合一しないこと、あるいは、果てなき愛——ジュネ/ブランショ、ユリイカ、査読無、43巻1号、2011、pp. 200-209

④ 郷原佳以、2009年度(平成21年度)研究成果報告 ミシェル・ドゥギーの「commeの詩学」序説——ドゥギー/ジュネット論争(1)、関東学院大学人文科学研究部報、査読無、34巻、2010、pp. 3-20

⑤ 郷原佳以、「全体へのパッション」あるいは名前の射程——『彼方への一步』に至るブランショ、関東学院大学文学部紀要、査読有、119号、2010、pp. 1-31

http://opac.kanto-gakuin.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/U_CHARSET.utf-8/NI20000884/Body/gohara.html

⑥ 郷原佳以、「外光」に浸される現代性[モデルニテ]の「典型」と「様相」——マラルメの詩論展開におけるマネ論の位置、関東学院大学文学部紀要、査読有、116号、2009、pp. 7-37

<https://library.kanto-gakuin.ac.jp/e-Lib/bodyview.do?bodyid=NI20000607&elmid=Body&lname=007.html&loginflg=on>

⑦ 郷原佳以、自己を／で織る詩——蚕になるデリダ、ユリイカ、査読無、41巻11号、2009、pp. 192-208

⑧ 郷原佳以、アブラハムから雄羊へ——動物たちの方々を向くデリダ、現代思想、査読無、37巻8号、2009、pp. 156-171

[学会発表] (計6件)

① 郷原佳以、「ブランショとフロイト--反復強迫をめぐる」、シンポジウム「フロイトの時代--文学・人文科学・無意識」、2011年11

月5日、東京大学本郷キャンパス情報学環福武ラーニングシアター

② 郷原佳以、ミシェル・ドゥギーの「commeの詩学」序説--60-70年代隠喩論争、人文社会科学系若手研究者セミナー、2011年7月10日、日仏会館501会議室

③ 郷原佳以、遺骸としてのイメージ--サルトルに答えるブランショ、日本サルトル学会、2010年12月4日、立教大学

④ 郷原佳以、From Abraham to a ram - Derrida's focus on animals、2nd Derrida today conference、2010年7月21日、Goodenough College (London, England)

⑤ 郷原佳以、「全体化のパッション」あるいは名前の射程--『彼方への一步』に至るまで、バタイユ・ブランショ研究会、2010年5月29日、早稲田大学

⑥ 郷原佳以、La « passion du tout » ou d'une totalité à « facettes » infinies、A Workshop on Maurice Blanchot's *Le Pas au-delà*、2010年3月27日、The University of Aberdeen (Scotland)

[図書] (計4件)

① 郷原佳以、他、水声社、『別冊水声通信文学とセクシュアリティ』、2012(掲載決定)

② 郷原佳以、他、組立、『組立--作品を登る』、2012、pp. 52-64

③ 郷原佳以、左右社、『文学のミニマル・イメージ モーリス・ブランショ論』、2011、p372

④ 郷原佳以、他、Paragon/Vs、*Blanchot dans son siècle*、2009、pp. 140-146

[その他]

ホームページ等

<http://www.geocities.jp/detruireditelle/kai.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

郷原 佳以 (GOHARA KAI)

関東学院大学・文学部・准教授

研究者番号：90529687

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：